

あそ 9

2007



正平鐵筆



雲庭
山田正平

あそ

九 月



あずさ

東京 佐藤喜孝

梅雨空とビニールハウスとは同じ
青霧や町のとなりに葡萄園
くわくこうの後ろがはからほとぎす
梅雨茸の百會に雨のたまりぬる
白蝶の上を黄蝶のいそぎゆく

風花

日輪のかけらの如く風花舞ふ
逢へば訣れ万の風花手に炎やす
かなぶんや山の没日を手に拾ふ
湖底の森乾きて梅雨の蝶生る
早苗ほぐす指へ朝沁む母郷の水

埼玉 渡邊友七

ひたすらに雨に打たるる栗の花
縄文のビーナスに会ふ巴里祭
はじめてのルバーブのジャム露涼し
夏の菜園盛大に食む先住民
釣忍かかげ和菓子屋開店す

東京 赤座典子

梅雨茸のことはりもなし我が家かな
大鰻どこの生れか問ひただす
蓼科の山に一礼夏の旅
夏の霧神に誘はれかくれんぼ
生きざま暗中模索夏嵐

東京 安部里子

東京 遠藤 実

とろろ汁運河が寂びゆくばかりかな
能面の彫り深くして獺祭忌
秋の雨光を添へて鎖樋
追伸の一言重きこぼれ萩
拗ねたよに昼のちちろの声やまず

野辺歩き遠き会釈の夏帽子
高原の谷の隠れ湯薬狩
伽羅路にほどよき太さ摘み集む
来る人のありて夕餉の岩魚焼く
郭公の呼ぶ声いつも後ろから

神奈川 鎌倉喜久恵

蓼 科

神奈川 木村茂登子

夏嵐来襲 田園さからはず
梅雨寒の火のなき煖炉よそよそし
大岩魚池に飼はれてみじろがず
紅花に声かけらるる花舗の前
絵手紙の南瓜の威風堂々と

東京 篠田純子

風の盆洩らさぬおもひ笠のうち
繋がれし人乗せて行く炎天下
繰り言は一日一度釣忍
避け難きは女性専用車の香水
百済観音にあくがれてゐて夏ぶとり

梅雨晴間子持ち鱈を煮る匂
頑張りの中弛みする戻り梅雨
堂々と嘘をつく人サングラス
冷さうめん江戸切子選りお客さま
素裕をきりり着こなす男かな

東京 芝 尚子

手桶の水切つて手渡す濃竜胆
驟雨去り樹々生きかへるビルの街
梅雨晴間老どち集ひ高笑ひ
子に会ふ日素のままである夏衣
鴉語で交す子鴉朝まだき

東京 芝宮須磨子

踏台やサマータイムといふありき
螢籠深夜の余震揺りてけり
青葡萄病めるときもさびしい時も
ただ蹤いてゆくだけでもゐる蟻の列
蔦旺ん巢のあるところ蜂零し

石川 定梶じょう

北海道

羊蹄山の森林限界岩袋
噴煙も涼しく見えて十勝岳
稚児車息吹きかけて旭岳
落の葉におんぶばったが踏ん張って
ラベンダー彼方此方で外国語

埼玉 須賀敏子

麦秋と云ふには小さき畑一枚
麦刈や薬缶と湯呑携へて
シヤリシヤリと麦を刈りつつ一歩一歩
山法師古城に見ゆる美術館
蛇を見る眼から一日離れずに

東京
鈴木多枝子

ほととぎす

暖炉に薪そろへてありぬ梅雨の宿
梅雨寒し土器のつぎ目のしろじろし
雨しげし白き匂ひのななかまど
森ふかく草木が水を溜める音
しづかなる女主人あゐるじの立居ほととぎす

埼玉
竹内弘子

青 簾

夕風や二人透きぬる青簾
海原に潮目くつきり透し百合
えごの花踏みゆく森の深さかな
土塊を捏ねる工房楠青葉
大正琴聴かせくれしを魂祭

東京 田中藤穂

父

はじめましてどちら様かな汗拭ふ
あなたさまどちらに住まひ白緋
お子さまはいらつしやいますのか夏薊
気をつけておかへりなされさくらんぼ
死の前に橋を渡りし水中花

東京 東 亜 未

みどり

三重 長崎桂子

この山の滴りすべてみどりかな
緑雨過ぐ歩廊に清涼みちて来し
庭涼し市松模様苔と石
車止五色あやなす揚羽蝶
黄の薔薇の名はジーナ・ロロブリジータ

土蔵跡駐車場たり夾竹桃
物がたりめきたる土蔵梅雨はげし
高原の山烟りたり栗の花
蝉返る一部始終に夜の闇
梅雨曇鳩や鴉の声ばかり

埼玉 早崎泰江

阿波踊がきて東京が淋しすぎる
遺影を抱いて台風がそれでゆく
ふるさとは山に隠れて秋彼岸
敬老の日席ゆづられて断りて
もの忘れわすれぬ唄に赤とんぼ

東京 堀内一郎

台風の通過待ちする古都の駅
株分けのモネの睡蓮咲き競ふ
はからずも祇園祭の人込みに
あの世この世一緒に願ふ梅雨の寺
鮎釣の自慢話と鮎を食ふ

東京 森山のりこ

東京 森 理和

売れたのかしら毎日かはる浴衣柄
コンビニの明かりの傍に鶉そだつ
巢立ち鶉身じろぎもせず三羽寄る
塵紙を丸めてぽいと木槿散る
白桃のばかりと割るる種の芯

北海道

東京 吉成美代子

夏雲の真下に開けオホーツク
音もなく白睡蓮に風渡る
ひと巡りして草いきれ五稜郭
ラベンダーまだ手に香る夏の宿
どこまでも真っ直ぐな道大夕焼

鄙は良しと言ひつ春の六本木
春昼や鴉とび立つさくらの木
額の花足はひらいて直立す
透きつ齒の越後訛や溝浚
大蚊の透けて脚からぬけおちる

東京 吉弘恭子



八月作品より

竹内弘子・佐藤喜孝

さみしさを透明にしてきうり操

佐藤喜孝

人間は、ただ生きていくだけで淋しい。さみしいから人を求める。友情・恋・師弟愛などなど。そして最後は一人で死んで行く。「生きることは即ち悲しみ（さみしさ）に耐えること」だと、漱石も中島らも書いています。人と出会うと、それだけ哀しみが多くなるような気がする。「さみしさ」を「透明」にして取り込み、飼い馴らせばいいのかも知れないと思う。（弘子）

八月の自動洗濯機とまらず

吉弘恭子

記録的な暑さが続いたこの夏は、少人数の当方でも毎日のように洗濯機が動いていたが、「とまらず」ということはなかった。洗濯物を、乾かして、たたくので、所定の場所に収納するのも、枚数が多いと手間ひまのかかるものですが、あまり重要視されない家事だと思ふ。（弘子）

つばくらめ足萎に地が逃げやすき

渡邊友七

「足萎」は「足弱」くらいがよいと思いました。少しでも足のぐあいが変わると、歩いていて地面と足の折合がわるいような、都合の良い感じがするのだと思います。「地が逃げやすき」がうまいと思いました。（弘子）

常常の向う側なる夕端居

赤座典子

端坐して夕端居をしている。すうーと「常常」と作者の間に時空の歪みが生じたのであろう。常常が向こう側にある夕端居。次の瞬間には消えてしまうかも知れぬ感覚を捉えた。物のみえたる光であらう。（喜孝）

コンビニは明るすぎるや月下美人

遠藤 実

「コンビニ」が明るすぎるところに注目したのが新鮮だと思いました。口語調の中七に付けた「や」が唐突にみえることと、夜目に大輪の白い花を咲かせる「月下美

人」の位置が不明確なので手直しが必要ですね。季語としての「月下美人」がこの場合むずかしいかもしれませんが。(弘子)

描きかけの画架そのままに揚羽追ふ 鎌倉喜久恵

「画架」を立てて何を描いておられるのだろう。表の本立の間にゆらりと「揚羽」がとんだ。絵筆を擱いて揚羽を追っているのだ。

ずっと以前アンティークドールを坐らせたり、枝付きの石榴を置いて、家事の際に描いていた。今は何かとっては出かけてばかりだ。静かに絵を描いて暮らしたいと思う。(弘子)

枇杷剥けば種徒に大きかり 斉藤裕子

果物は見かけも味(甘さ)も改良をかさねて、葡萄などは種のないのが殆どといっていいくらいだ。較べて「枇杷」の種の大きいこと。種のないのも不自然だが、せめていまの半分ほどの大きさにならないものかと、枇杷を見るたびに思う。(弘子)

香水や外人観光客一団 篠田純子

ヨーロッパへ旅行した時、ホテルのエレベーターが開いて六十歳前後と思われる男性が乗ってきた。頬で少し笑い、仄かな、良い香りを残して次の階で下りていった。特にダンディーというわけでもなく、白髪が混じったごくふつうの小父さんだったが、同乗の一同、此あるかな」と感じ入った。

日本の、とくに男性にこの類のオー・デ・コロンをつかうことを勧めたい。掲句は、女性が主で、「香水」プリンという感じだが、それでも汗くさいよりはいい。男性はオー・デ・コロン。(弘子)

梅雨晴れ間長生きをして長電話 芝 尚子

連句に長じていらっしやる方だということがわかる。無調法ながら、言葉をつなげていきたい誘惑にかられる。(弘子)

妙齡の草大福のつまみやう 定梶じょう

「草大福」は、関東地方でいう「草餅」のことだと思

います。有名な柴又帝釈天のは、草団子で、店頭でも折箱に団子と餡を詰めて売っていて、お箸で食べるようですよ。

この句は、わかい綺麗な子が「草大福」を食べているのを、こちらで見ているだけのことのようにですが、もう一度読むと通り一ぺんの句でないことが分かります。(弘子)

目を閉じて汗うっすらと乳呑む子

須賀敏子

乳飲子の乳を飲む姿をこの一句で鮮やかに想いでした。至福の時なのであろう。眠りながらも口を動かしている時もあった。(喜孝)

自転車のおづつかつてくる早梅雨

竹内弘子

人なかをそこのけそこのけとばかりにチリンチリンとベルを鳴らしてママチャリが走る。若い人はスピードも出すが総じてハンドルさばきがうまい。しかし中年以降になると思う通りにはゆかない。膝などをいたため歩

に困難が生じ自転車を移動手段につかう人も私のまわりにいる。踵を前輪で踏んでも一言もなし、ハンドルが腕や鞆に触れると歩き方がわるいとはかりににらみ返される。いらいらした感じを早梅雨に代弁させている。(喜孝)

鼠火花兄弟多く育ちたる

田中藤穂

古くは「富国強兵」と言い、「生めよ増やせよ」というスローガン(標語)もあつたと聞いています。「鼠算」物が複利的に急速に増加する場合のたとえ(広辞苑)

句会でも好評でした。「鼠火花」を即きすぎと思いませんでした。みな子供の頃を懐かしんでいるようでした。(弘子)

弟が杖ついてきし暑中見舞

堀内一郎

暑ければ弟の頭に手を冷やす

弟の夏六文銭と登山靴

願いもむなく弟さんがこの夏逝かれた。一郎兄には肯定しがたい出来事である。二句目とくに哀切きわまりない。合掌。(喜孝)

靖國に女人はをらず油蟬

佐藤喜孝

八月の自動洗濯機とまらず

吉弘恭子

つばくらめ足萎に地が逃げやすき

渡邊友七

常常の向う側なる夕端居

赤座典子

夏の夜我が耳聞こゆ子守歌

安部里子

日の丸の折目がきつき終戦記念日

遠藤実

描きかけの画架そのままに揚羽追ふ

鎌倉喜久恵

私だけの哲学の道著莪の花

木村茂登子

枇杷剥けば種徒に大きかり

斉藤裕子

香水や外人観光客一団

篠田純子

梅雨晴れ間長生きをして長電話

芝尚子



前月作品

透きとほるすずかけ若葉昼下り	芝宮須磨子
妙齡の草大福のつまみやう	定梶じょう
目を閉じて汗うっすらと乳呑む子	須賀敏子
自転車のぶつかつてくる早梅雨	竹内弘子
鼠花火兄弟多く育ちたる	田中藤穂
吸盤となりて鯉くる半夏生	東 亜 未
健やかなかぼちやの花は顔なじみ	長崎桂子
青梅にあを深まりぬ雨雫	早崎泰江
暑ければ弟の頭に手を冷やす	堀内一郎
ともかくも姉妹が集ひ鮎料理	森山のりこ
おもひではいつもここまで水水	森 理 和

喜孝 抄





富士山を背に左に曲がると、三保の松原。とんとんと進むと駿府。清水の次郎長の育った宿場を通り、東海道五十三次、彌次喜多も歩いた東海道。江尻を過ぎるとすぐ、茶畑の中に小生の生家がある。

さて昭和十三年の頃の記憶であるので定かではない所が多いと思いますが。。。

東海道はまだ砂利道で、自動車も少なく緑も多く、昔ながらの並木や家並が残る古道でした。さてその東海道を家より十五分位歩いた所に保育園がありました。その保育園での話です。

東海道より五段位石段を上ると、敷石のゆるやかな上り勾配の参道がずーーと大樹の中の奥の院までつづいており、その参道の右側に木造の園舎が二棟並

んで建つてをりました。まわりは茶畑と蜜柑畑が広がっており、緑深き静かな所でした。

奥の院から茶畑を通り細い道が、裏道として日本平まで続いておりました。少年の頃遊びながら日本平まで歩いた道です。

さて小生の事ですが、五歳の当時の出来事なので、記憶も定かでないのですが、何か知らないけれども、この事だけは不思議と頭に残っているのです。

私が保育園に最初に行った時の話です。友達は皆保育園に入つて行くのですが、私は母親と離れるのがいやでいやで母親にしがみ付き泣いておりました。園の先生が優しく迎えに出て来られたのですがさあ大変。私は子供ながら最後の抵抗とばかり、石を拾い先生に投げつけたのです。

現在でも保育園に行くのがいやで泣く子がいるようですが、石を投げた話は聞いた事がありません。

日本で私一人かも知れません。

それでも、まあ無事に卒園し、良く今日まで生きて来たものだど、つくづく思います。迷惑をかけた母も四十八才で亡くなり、その当時の話を聞く事も出来ませんが、母には苦労かけたことでしょう。

記憶と云う不確かな世界。

書いていて、客観的に自分を見つめても、ただ胸が疼き、重くなり、淋しさまで覚え記憶の連想に押し潰されそうになります。

過去より、前向きが良いですね。

でも、又石を投げる事があるのだろうか？

最後に一言。

現在のふるさとは、昔の田園風景はなく、茶畑、水田も少なくなり、工場、マンション・住宅と立ち並び、又日本の交通網の重要な場所となり、東名高速道路、国道一号線、東海道新幹線、J R 東海道本線、静鉄、今帰ると浦島太郎の気分です。



漢訳蕪村

(秋の句)

王 岩

千般恋之情 願糸白為先

割後稻田萌新緑 紅葉散落夕陽中

人在迷茫曉霧中 似在画上夢裡行

羅衣金屏風上掛 空被秋風知是誰

片雲陣雨落 半江斜日紅

恋さまざま願の糸も白きより

参考：憶得少年長乞巧、竹竿頭上願糸多。
白居易・「七夕」

ひつぢ田に紅葉ちりかかる夕日かな

朝霧や画にかく夢の人通り

金屏の羅は誰があきのかげ

参考：紅燭秋光冷画屏、
輕羅小扇撲流螢。
天階夜色涼如水、
坐看牽牛織女星。
杜牧・「宮詞」

半江の斜日片雲の時雨かな

参考：一道殘陽鋪水中、
半江瑟瑟半江紅。
可憐九月初三夜、
露似珍珠月似弓。
白居易・「暮江吟」

本郷区壱岐坂上の熱中症

十葉の濡るる湯島の切通し

根津神社雨の茅の輪の下ぶくれ

安田講堂の焦げた傷あと草いきれ

片蔭の一系列に蹤くS字坂

女坂の易者の欠伸藤日和

不忍の池のはちす葉うねり生ふ

夕蟬や啄木弱音吐きし坂

坂の町
篠田純子

看板はトタン風流ところてん

送り火を跨ぐ順番路地匂ふ

巻き舌の客引き湯島熱帯夜

夕涼み昔の顔の根津の猫

無縁坂に一期一会の瑠璃揚羽

鳩の子の鯉に吸はれて溺れけり

鳩の子の日毎色づく羽のいろ

鳩の子の蓮の浮葉に坐りをり

について、結句を「誰も詠め」としなければならぬとしましたが、これは私の誤り。「青田の鷺は」の「は」も係りの助詞ですが文末を終止形で結ぶべき助詞。原句通り「誰も詠む」がただしかったのです。お詫びして訂正致します。活字になって気がつくなんてお粗末至極。申しわけありません。



「あを林檎」 句会場変更のお知らせ

十月より句会場変更になります。ご注意ください。

白金台福祉会館

港区白金台四の八の五

電話 3440-4627



特別作品鑑賞 坂の町

篠田純子

吉弘恭子



女坂の易者の欠伸藤日和

女坂に男の易者が座っていた、と思う。何で男と思ったのかというところとわざわざ女坂という語を持つてきたのだ。

かの有名な新宿の伊勢丹の処に立つて手相を覗てくれるおばさん（高校の帰りに見たのですがおばさんに見えた）がいた。何をみんな見てもらっているのだろうと、横目で通りすぎたことを思いだした。途切れることがない人がいれば欠伸などするはずもなく、ましてや女性は口に手を当てて欠伸はするものと親から教わった。藤の花の咲いている様と、男の欠伸の何とも妙な取り合わせが面白くおかしかった。

夕涼み昔の顔の根津の猫

我が家には一年半ぐらい前から毎日野良猫が来る。出て行きたい時には、ドアに前足を伸ばして合図する。帰ってきた時は前の家の木斛の木の上で待っている。この猫は昔からいる猫の顔をしている。ペルシャ・シャム・アビシニアンなどと違って鼻は低く見た感じペしゃんと感じた、が優しい顔立ちだ。昔の顔という表現はむずかしいが、根津という地名と夕涼みという言葉の葉によつてグンと生きています。

巻き舌の客引き湯島熱帯夜

巻き舌というと江戸っ子独特のよつに言われている。今ではどこでも聴かれるかもしれないが、威勢よく声をかけられるとその気になつてしまうかも知れない。天神下から上の池之端にかけての花街は婦系図に出てくるところ。熱帯夜でも鯉背な声で暑さも吹き飛ばようだ。巻き舌という語も時には俳句になると又違った感じに生きてくるものだ。言葉は生きているものだ。



助動詞『まじ』

定梶 じょう

学校教育では、よりどころとなるべき一定の基準が必要である、といわれます。古文の授業では、それが平安時代とその周辺の「ことば遣い」です。そして「文法の誤りである」と指摘するとき、ちよつとした配慮が必要です。一つは、古代から現代までその遣い方に変化がない場合、活用する語の連体形が名詞などを修飾するのは、日本に文字ができて以来現在に至るまで変化していません。「食べる時」「落ちる涙」など。もう一つは、時を経て遣い方に変化が起き、それが定着した場合。先の例で言えば「食べる」「落ちる」は、終止形にも修飾する語としても遣い、少し以前は「食ぶる」「落つる」の形でした。そのもつと前は「食ふ」「落つ」が言い切る形。変化しています。

さて、『日本語を知らない俳人たち』の著者・池田俊二さんも指摘なさっているようですが、片山由美子さんは『まじ』の接続の誤り』について「じつは樋口一葉も間違っている。『仰せらるまじ』という表現があるので、『まじ』が終止形に接続することは承知しているはずであるが、同時に『苦勞はかけまじ』とか『聞かぬとは申されまじ』などとも書いているのである。」

こういう文章を読むたびに、やれ〜と思つてしまのですが、ここは辛抱して説明しますので、『あを』のみなさん。もうしばらくおつきあい下さい。

片山さんの指摘なさった「まじ」は、さきほどの分類の、もう一つ、の部分に当たるわけですが、古語辞典の説明によると、平安時代には「掛くまじ」申

さるまじ」などと遣いましたが、中世・武士の時代に入ると、二段動詞には未然形につく例がでてくるといひます。

〈一人も助けまじきものを〉 平治物語

そしてそれ以降、しっかりと擬古文以外「終止まじ」をつかう例をほとんどみなくなります。

そして明治。片山さんは、文法用語や論理的なことばの分析などが、現代の如くこの時代にもゆきわたっていたように思つていらつしやつるようですが、違ひます。一葉が「仰せらるまじ」と正しくつかつたのは、平安期の文章に読み慣れていたせいかもしれません、「苦勞はかけまじ」と誤つてつかつたのは時代の影響かもしれません、いずれにしろ明治の人達も前代の江戸期同様「かなづかい」や「ことばづかい」の意識はそんなに強くなかつた。決して一葉個人を責めることはできないのです。

〈年増嫌いでも褒めずには置かれまじき風体〉

露伴『五重塔』

そして現代。二段動詞に接続するにたゞしく終止形をもつてする「まじ」はいよいよよみなくなりまふ。吉川英治の『宮本武蔵』に、武蔵が心境をつづろろとする場面で「われ事において悔いまじ」とありまふ。「悔ゆまじ」ではありません。

歌留多とる皆美しく負けまじく 虚子

よろめきぬスウィートピーに触れまじく 未生

一方、先の分類の例にあげた「食ぶる」「落つる」など連体形お遣い方。片山さんも挙げていらつしやいます。うっかり終止形をつかつてしまふというまちがいは、文法を誤つた句に概ねいいものがないのが普通なのに、なぜかこのまちがいに關しては佳句がどつさりある。

並び古る木白石白燕きて 村上しゅう

熟れて落つ春日や稼ぐ原稿紙 秋元不死男

戸を閉ざすときのみ眺む冬木あり 佐野美智子

酒代に代う古本もがな冬の月 竹久夢二

収拾のつかぬくらい、まだまだあります。

この、連体形をつかうべき処を終止形をつかつてしまふ間違いは、実は「歌合せ」の昔からあるといえます。近世には、ある国学者の〈ほととぎす都の空の初声はきかるもうれしなくやさしし〉の歌に対して、他の国学者が「きかるも」は「きかるるも」であり「やさしし」も俗言にまぎれた誤用である、と批難している。とは、足立巻一さんの御著書によって知りました。音数をととのえることを優先したための誤用、ということでしょうが、その数、多すぎます。「犬が走る」といい、「走る犬」というように、四段活用の動詞では終止、連体同形です。そんなことがあるいは二段動詞に影響して「眺むる冬木」とすべき処を「眺む冬木」としてしまふ、ということもありそうです。しかし、平安以降現在に至ってもやはり「文法の誤り」として否定されます。前述の

分類でいえば最初の例です。「酒に代ふ古本」が定着することはなさそうです。能村研三さんに〈活字力衰ふままに亀鳴けり〉がありました。「衰ふるまま」ではどうしていけなかったのか。「ままに亀鳴けり」の「に」が必要である、ということなのでしょうか。あるいは、能村さんにとって「衰ふまま」が正用であり一字不足だから「ままに」とした、と考えることも可能です。その方がより文語的である。作者を亀に擬した句でしょうが、どう理解するにしても、原句がいけなかつたらやはり「文法の誤り」は目につき易い。

追記

八月号掲載の『きりもなや』に私のミスで誤りがありました。

うべしこそ青田の鷺は誰も詠む 篠田侂二郎

について、結句を「誰も詠め」としなければならぬとしましたが、これは私の誤り。「青田の鷺は」の「は」も係りの助詞ですが文末を終止形で結ぶべき助詞。原句通り「誰も詠む」がただしかったのです。お詫びして訂正致します。活字になって気がつくなんてお粗末至極。申しわけありません。



「あを林檎」 句会場変更のお知らせ

十月より句会場変更になります。ご注意ください。

白金台福祉会館

港区白金台四の八の五

電話 3440-4627



あをかき集

紫陽花
額の花
猫

堀内一郎 選 (六人目以降五十音順)

絵具の白パステルの白白紫陽花 東 亜 未
頭から如雨露の水あび額の花
額の花帰路は真つ直ぐ新幹線
猫背よと父後ろからけらつつき
甘味屋に猫をり葛切冷えてをり
心太 三毛猫念入り毛繕ひ
膝にゐる猫と春日を半分こ 吉弘恭子
左足出してたしかむ恋の猫
恋の猫匍匐前進静かなり
目移りの猫と一緒に鱈かな



東 亜 未

白の強調に違和感はない。作者の透明度であろう。「心太」の句、リズムにのせるようなことはなく、あるがままに書かれている。着地はあると思うが。例えば「三毛猫」を「三毛念入りに」としたい処などなれど兼題が「猫」なので「三毛猫の毛づくろひをる心太」では。「猫背よと」は佳品である。

吉弘恭子

身辺を大事に生活を楽しんでいる。
現在では希少なこと。猫が多く花より幼

春麗や石につまづく猫車

唐傘をはみ出すふたり濃紫陽花

濃紫陽花胡弓に泳へしもの溢れ

盛り塩を踏んで了ひぬ額の花

見るものはほとんど忘れ白あぢさゐ

モルタルのしみの地図めく額の花

授かりしいのちの写真手鞠花

こまごまと娘へ小言濃紫陽花

あぢさゐや萼小指の爪ほどに

夕茜背景とする濃紫陽花

土へ移り歪に咲ける額の花

額の花若き記憶に隙間なく

猫車に並びて売らる夏野菜

家猫の床に腹着く夕涼み

祝電に紫陽花の鉢添へくれし

半身を湯に湯治場の濃紫陽花

篠田純子

赤座典子

鎌倉喜久恵

気な小動物と息が合うようだ。

篠田純子

胡弓を泳へしものとは天晴れ。私に取っては、あの八尾の夜の哀愁は二十年経っても忘れられない。忘却、いのちの写真など多彩だが「娘へ小言」が本来の姿かも知れない。

赤座典子

描写にこころしたい。一途は良いが例えば「爪ほど」を「先ほど」くらいに抜きたい。「若き記憶」は残る作。

鎌倉喜久恵

可も不可もなし安定している。しかし平穏な目が捉えた風景は暖かい。実感の強さである。

安部里子

俳句は解りそうで解らぬ処が良いのか

あともどりできぬ参道紫陽花寺
人波が引いて息つく額の花
大輪の間につつしむ額の花
針のめど通らぬ膝に子猫くる

安部里子

紫陽花やわかりあへねどわかちあふ
廃校の変わらぬものに額の花
水無月の別宅二軒りちぎ猫
家猫の風の涼しきところ知る
星月夜今までどこに猫帰る

遠藤 実

あぢさゐや溪流の辺にピザの店
紫陽花や髭の駐在敬礼す
額の花回転寿司の皿の数
夏枯れや猫の足音だけの店
大道芸遠巻きにして額の花
八重の白を“墨田の花火” 額の花
あぢさゐや傘も忘れず荷の内に

木村茂登子

も知れない。だから「二軒」などとせず
「行ったり来たり」で良い。

「風の涼しき」が良く伝わる。

遠藤 実

「ひとり」を「辺に」としたが「の」三
個は過多。「額の花」は「あぢさゐ」が
良い。二句目、原句「敬礼かな」だが「や
かな」になるので気をつけたい。「猫の
足音」は出来ている。

木村茂登子

一句目原句「八重の白を“墨田の花火”
といふ額の花」。「といふ」の三文字は辛
い。「額あぢさゐ」が良いと思う。

「あぢさゐ軍団」とは妙。「歴史の人」
はシーボルトを語って奥深い。

定梶じょう

「牛乳壺」ではまわりの空気が連想で

あぢさゐは絵の具をたたくやうに描く
あぢさゐは軍団鬨の声を挙げ
あぢさゐの歴史の人にシーボルト
教卓や牛乳壘に額の花

定樞じょう

額咲くや運鈍根の運を欲り
猫生まる建設資材置場かな
貧つのるあぢさゐの赤まさるとき
猫の子に墓碑の屹立啼きにけり
親猫の子猫をかはす暑さかな
冷房の風厭う猫かくれんば
あぢさゐの玉の小揺らぎ雨の中
長生きも藝の内とや濃あぢさゐ
雨雲の近づく早さ額の花
尋ね来て紫陽花寺に憩ひする
店先の濃紫陽花に人目あり
真白なあぢさゐすうと水色に

芝宮須磨子

芝 尚子

き人間模様も見えてくる。俳句の不思議。
「貧つのる」言い切れぬ切迫感を感じる。ものの極み赤が象徴している。前に書いたか知れぬが、先輩の絶句「生きるだけは生きよう薔薇は真つ赤 成田凡十」

芝 尚子

静かな日々が窺われる。それも芸の所作などであろう。くよくよの毎日の私などにとって偉大な存在である。「雨雲」実感であろうが、生命に通じるようだ。

芝宮須磨子

七変化、いろいろな場面を見せて飽きさせない。情の篤さであろう。
「店先」「根本」にサーブス精神が見えてくる。

須賀敏子

街路樹の根本にそっと額の花

首輪つけ紐で引かれる肥り猫

通るたび吠える犬ぬて額の花

境界の定まらぬまま額の花

紫陽花の寺に通路の杖置かれ

紫陽花や九十才九十二才二人の店

空梅雨や夢二の猫の通りけり

紫陽花の丘三方に海の見ゆ

紫陽花はローランサンの色流す

あぢさゐや兄嫁伝ふ母の味

額の花豆腐屋の妻少し老い

朝夕に猫にももの云ひ梅雨寒し

紫陽花の淡いもも色介護人

木灰撒き月日をほぐす手毬花

ロープウエー傾斜そろそろ額の花

少年に猫は弟かたつむり

須賀敏子

田中藤穂

長崎桂子

「境界」が人間の不自由さを語る。それにつけても額の自由なこと。

「九十九才九十二才」は長過ぎるので、「卒寿過ぎたる二人店」で十分。「夢二の猫」は見どころ。

田中藤穂

「丘三方」「ローランサン」に夢を感じる。それに引きかえ、生活風景は地味そのもの。町に目を配ったり、猫と話をしたり忙しい。

長崎桂子

「もも色」に不安感も漂い複雑な介護事情も浮かぶ。「猫は弟」の断定は見事希少な作とした。

早崎泰江

微妙な動きを捉えている。目立たぬがこの積み重ねがやがて花ひらく。「山手線」スピード感を伝えて潔い。

梅雨しとど軒下に猫かなしき眼

紫陽花をつぎつぎ通過山手線

紫陽花の美しき日や雲あつし

朝の鴉やさしく啼けり額の花

瓶のめだか猫の気配に身をかくす

かはほりに興味しめさず猫の行く

紫の風運びけり濃紫陽花

野良猫の飛込む先は額の花

キラキラと猫の首輪よ額の花

梅雨寒や捨猫の声耳につく

昨日より色深くなる濃紫陽花

額の花傘を返しに駿河台

ふくよかに紫陽花つづく水平線

狛犬と子犬戯れつく額の花

青田風土間の隅なる猫の皿

野良猫に餌置く媪額の花

早崎泰江

森山のりこ

森 理和

森山のりこ

「紫の風」の把握は只ものではない。後が影薄く見える。私など励まされる氣勢を感じた。

森 理和

一句目「額の花」が光る。読み良いことと音の響き合いである。意図して得るものではなく長年の学習から知らず知らずの中に授かるものなのだ。「継続は力なり」等と人は言う。額の「が」駿河の「が」傘の「か」返しの「か」飛び飛びに韻を踏んでいけるのも見逃せない。

渡邊友七

「村貧し」チクリと現在の農村事情に触れる。昔から二黒中宮の年は不景気と言われる。他の産業についても的を射たようだ。「梅雨猫」は梅雨の猫で良い。自身の反芻にも似る。

紫陽花に顔を埋めて亡き人ぞ
渡邊友七

あぢさゐの湖の一角に色張れり
額の花玉芽に朝の雨煙る

寝落つ灯に満月わたる親子猫

己が身をねぶり老いゆく梅雨猫

梅雨の月猫を探しに外へ出る
佐藤喜孝

豆腐屋のもう角曲り額の花

紫陽花の首を回して活けをはる

爪立ちて猫背を伸ばす冷房車
竹内弘子

梅雨に飽きあぢさゐ毬のままくだつ

額咲くや遊ぶ子どもの中に鬼

あぢさゐを忘れてからの針仕事
堀内一郎

十年ややがてひとり額の花

猫足の墓のいくつか蝉しぐれ



七月の句会

傳句会

中野区 カフェ傳

梅雨晴間子持ち鱈を煮る匂ひ 尚子
 瓜漬や夫のはらからつつがなく 敏子
 笑ひ声聞こえる写真水鉄砲 裕子
 自転車のぶつかってくる早梅雨 弘子
 夏子ゆゑ弱いのですと子猫抱く 喜久恵
 交差点朝顔の鉢のぞきけり 敦子
 おもひではいつもこまで氷水 理和
 麦ごはんきちんと食べて日向水 純子
 くらげからくらげへわたす謀 喜孝
 椎の闇昨夜鳴きあし牛蛙 藤穂
 戯れ猫の抜け毛舞ひたつ梅雨の空 恭子

調句会

さいたま市岸町公民館

額縁のごとき水門梅雨晴間 綾子
 郭公や田に急ぐ水の嵩増して 友七
 朝顔市乾きはじめし鉢の土 敦子
 土踏まず公園を出て冷索麵 喜孝
 切り落す紫陽花土に山なせる 藤穂
 土蔵跡駐車場なり夾竹桃 泰江
 紫陽花をぐらりと挿せり欠け土瓶 弘子

あを林檎

中央区 京橋プラザ

蒼穹のいろに染まりてゆく蜻蛉 恭子
 魂祭一升瓶と立膝と 喜孝
 首都高を唄つて過ぎる熟帯夜 純子
 稜線に吐息めらめら朱夏の終 東亜末
 耐ゆるへし原爆の日のこの炎暑 藤穂
 女郎花せらりて話を離婚歴 実

七座句会

中野区 小川苑

休会

連句勉強会 毎月第1日曜

中野坂上 佐藤喜孝 (090-9828-4244)

傳句会 毎月第2火曜
カフェ傳 森理和 (03-3368-4263)

調句会 毎月第1金曜
岸町公民館 竹内弘子 (0488-86-3501)

あを林檎 十月第3日曜
白金台福祉会館B室
東亜末 (3446-2770)

七座句会 毎月第4火曜
小川苑 吉弘恭子 (090-9839-3943)

あを吟行会
未定

(十一月)



今月も遅刊してしまいました。申し訳ございません。今月の表紙は説明のいらぬ白曼珠沙華。鎌倉で拾ってきた球根を発泡スチロールの箱の中に埋めた。数年はただただ葉が茂るだけであった。昨年、浮き上がっていた球根を思い切つて埋めてみた。それがよかつたようで白と赤の花を楽しむことが出来た。うれしくて何枚も写真を撮つた。四年間私と共に行動してきたカメラもこの曼珠沙華で次のカメラにバトンタッチをすることになった。まだまだ使えるのだがと思いつつ……。「へ赤い花なら曼珠沙華」とあるように赤い色がふつうだ。なぜ拾ってきた球根に白い花が咲いたのだろうか。しらべて見ると白は團芸種だぞうだ。日本では死人花など別名からして暗い印象だが、そのようなしがらみがない西洋では品種改良が進んでいるぞうだ。お隣韓国では、「相思華」ともいふぞうだ。花と葉が同時に出ることはないから「葉は花を思い、花は葉を思う」という意味だぞうだ。



かの懸り羽子も夜雨にしづくすや 八田木枯
「夜さり」の中の句。私はこの句が好きで不遜にも脇を付けてしまった。

蒲団の襟の別珍に顎

新年の発句の脇には新年を付けるのが習わしらしい。しかし発句の情緒から冬で作ってみた。少々不安であったが先日強い味方を見つけた。

ここに天野雨山編の『昭和連句総覧』（一九三二年六月刊）があるので、その新年の部をのぞいてみましょう。

収められた十九歌仙の発句・脇は、当然すべて新年ですが、さらに春を三句続けて、その間に春の月を出している巻があるかと思つと、新年三句で雑の句をはさんで、五句目に夏の月を出している巻があつたり、新暦に従つて新年は晩冬（季冬）とし、冬の句は二句までという原則によつて二句で終り、雑二句をはさんで、約束通り五句目に秋の月を出している巻もあつて、新旧入り乱れています。しかし、現在は新年を晩冬として二句で終り、雑二句をはさんで五句目に月（秋）を出すという作法に統一したいと思ひますので、桐雨先生の第三は、雑となりました。『連句のすすめ』（暉峻康隆・宇咲冬男）
危惧していたことが解消した。興味のある方、第三を付けて送つて下さい。（喜孝）

二〇〇七年九月号

発行日

九月三十日

発行所

東京都中野区中央2・50・3

電話

090・98228・4244

印刷・製本・レイアウト

佐藤喜孝
竹徳房

カット／恩田秋夫・松村美智子

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円（送料共）／一年

郵便振替

00130・6・55526（あを発行所）

乱丁・落丁お取替えます。